奈良・四条遺跡

1 所在地　橿原市四条町
2 調査期間　一九九一年（平3）八月～九月
3 発掘機関　奈良県立橿原考古学研究所
4 調査担当者　林部　均・松本美賀
5 遺跡の種類　都城跡
6 遺跡の年代　七世紀後半～八世紀前半
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

四条遺跡は、奈良盆地の南部、橿原市四条町に位置する。弥生時代から中世にかけての、さまざまな遺構が存在する遺跡で、中でも、大量の「木の埴輪」が出土した四条古墳、四条二号墳、ならびに、藤原京に関連する条坊遺構が注目される。

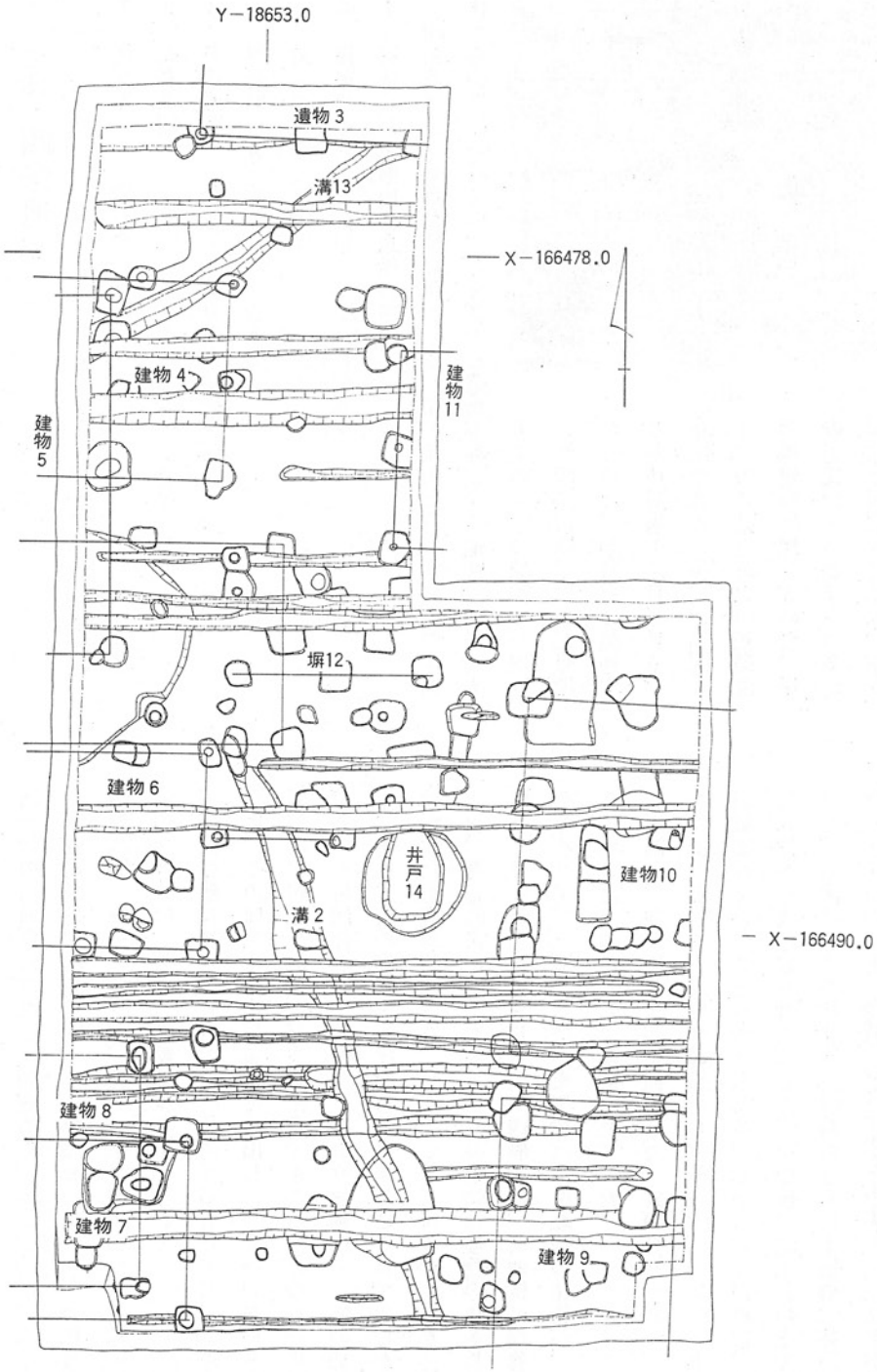
（桜井・吉野山）

今回の調査（第一二次調査）は、奈良県立医大の基礎医学棟建設に伴うもので、岸俊男氏による藤原京の条坊復原に対応させると、下ツ道をこえて四条大路を西へ延長した東西道路の北側で、下ツ道から西一坊の南西坪にあたる。調査面積は約三五〇㎡である。

調査の結果、地表下約二・一mにおいて、飛鳥時代後半の掘立柱建物八棟、掘立柱塀一条、井戸一基を検出した。遺構の検出面は、地山ないしは、藤原京の整地土の上面である。

掘立柱建物は、調査区中央に位置する井戸SE一四を取り囲むように、その周囲（北・西・東）で検出した。また、井戸SE一四の南側では、顕著な遺構の存在を確認できなかったので、広場的な空間であった可能性が強い。また、掘立柱建物は、柱穴の切り合いがなく、建物配置の変遷までは明らかにすることはできなかったが、建物自体に重複が認められ、少なくとも二時期の存在が考えられる。なお、調査面積が狭いため、掘立柱建物は建物全体を検出できたものは少ないが、井戸SE一四の西側では、東西棟の建物が東の妻柱をそろえて、三棟ならび、東側では、南北棟の建物が、柱筋をそろえて南北に二棟ならんで配置されていた。

木簡は、井戸SE一四で検出した。井戸SE一四は、直径一・八mの掘形をもち、土層の観察から、その中に一辺〇・九mの井戸枠が組まれていたことが考えられる。しかし、井戸枠は、井戸廃絶時に北側から抜き取られたらしく、その後は粘土質の土で埋められていた。木簡は、この抜き取り痕跡のさらに下層の、井戸が機能していたときの堆積土（砂層）のなかから出土した。文字が判読できた


Y−18653.0
遺物 3
溝13
X−166478.0
建物 4
建物
11
建物
5
塀12
建物 6
井
戸
14
建物10
溝 2
X−166490.0
建物 8
建物 7
建物 9

第12次調査遺構図

ものは、三点であるが、それ以外に、墨痕のある削屑が多く出土した。木簡と伴出した土器は少ないが、土師器、須恵器がある。ともに七世紀後半から八世紀前半のものである。また、井戸廃絶時の埋土である粘土質の土層から出土する土器も、七世紀末から八世紀前半のものであり、おそらく、井戸SE一四は、藤原京から平城京への遷都に伴い廃絶したものと考えられる。

8　木簡の釈文・内容

(1)
・「〈□□□国□〔酢カ〕
　秦
・「〈阿□〔　〕　(105)×(18)×3　039

(2)
・「〈少□里□□
・「〈〔　〕　(66)×24×2　039

(3)
一□〔門カ〕　(92)×(20)×6　081

(1)の一字目は判読がむずかしいが、「酢」と読める可能性があり、「酢」という文字で始まる三文字の国名であると考える。割書きとなった左側の「秦」という文字は、人名であろうか。(2)は二字目が不明確で地名を明らかにすることができないが、「少□里」からの貢進物につけられた付札と考えられる。裏面にも墨痕は認められるが、腐蝕がはなはだしく、判読することはできない。(3)は木簡そのものは完形ではないが、文字は「一□」で完結している。二文字目は「門」である可能性がきわめて大きい。

四条遺跡では、これまでの発掘調査で多数の掘立柱建物や井戸、土坑、条坊の側溝などが検出されているが、木簡が出土したのは、今回の三点がはじめてである。藤原京関連条坊がみつかっている範囲（いわゆる「大藤原京」）においても、橿原市葛本町の下明寺遺跡で出土した習書木簡に次いで、二例目である。さきの出土例が習書木簡であったことを考えると、ある程度の意味がわかる木簡としては、はじめての出土例といえる。なかでも(1)(2)の貢進物付札木簡の出土は、国名や里名までは判読できなかったものの、四条遺跡をはじめとした藤原京関連条坊やその周辺でみつかる遺構の性格を考えていくうえで、きわめて重要な意味をもつものと考える。

なお、木簡の釈読にあたっては、和田萃、今津節生両氏からさまざまなご教示を得た。

9　関係文献

奈良県立橿原考古学研究所「橿原市四条遺跡発掘調査概報」Ⅱ（『奈良県遺跡調査概報』一九九一年度　一九九二年）

（林部　均）